



第6章 平成21年度文部科学省・大学院教育改革支援プログラム

添田, 仁

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 8(平成21年度事業報告書):45-45

(Issue Date)

2010-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002063>



地歴科教育論D

2006年度と2007度の2年間にわたって、文部科学省「資質の高い教員養成推進プログラム」の採択を受けて実施した「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」事業の継続・定着をはかるため、2008年度に引き続き2009年度も前期に地歴科高校教員の資格を得るために必要な授業科目「地歴科教育論D」（前期・金曜3限）を開講した。前年度までと同様に、教室での講義も4回行ったが、今年度も兵庫県立御影高等学校総合人文コース2年生（2年6組）の課題学習支援が中心となった。

授業では、22名の受講生が、「ポートピアランド」「Familiar」「神戸の洋菓子からKOBEの洋菓子へ」「みんなから愛される南京町」「KOBE feat. SEATTLE!」「神戸の『水』について」「IKUTA SHRINE」「王子動物園」のテーマで、8グループに分かれた2年6組の生徒を分担して指導し、研究成果は各グループごとにパワーポイントにまとめられ、11月13日（金）のクラス発表会を経て、最も評価の高かった2つの研究（「みんなから愛される南京町」「KOBE feat. SEATTLE!」）が学年全体の課題研究発表会へと進んだ。

また、「地歴科教育論D」の受講生の中から希望者を募り（2名が応募）、年度末の2月4日（木）に、御影高校第1学年の世界史A、第2学年の日本史Bの授業を提供してもらって、地域の視点を取り入れた世界史と日本史の研究授業を行った。（文責・河島真）

第6章 平成21年度文部科学省・大学院教育改革支援プログラム「古典力と対話力を核とした人文学教育」との協同

1、趣旨

神戸大学人文学研究科は、平成20年度文科省・大学院教育改革支援プログラムに採択され、10月から実質的な活動を開始した。これにともない、地域連携センターも、同プログラムと協同して様事業を展開することとなった。

今日の社会においては、「文化・政治をめぐる諸制度にゆらぎや軋み」が大きな問題となっている。これらは単なる現象の理解や対症療法では解決でき

ない現代の諸問題である。こうした現代においては、人文学研究者に対して、①専門深化による省察や批判、②文化の継承・発展、③現実的諸課題への関わりの強化、④異なる専門を理解し融合する能力が求められる。すなわち、原点に立ち返って抜本的に再検討する能力と、専門閉塞を打破し、課題を巡る具体的な応用によって、解決につながる能力とが同時に求められている。

こうした課題・社会的要請に対応するためには、まず原点に立ち返って原理的に考察する能力や学域を横断して人文学共通の課題を理解する基盤的素養が必要と考え、これを「古典力」とよぶ。また身をもって社会的現実を知る能力、および他の学域や社会と意思疎通できる高度な学術的能力が不可欠である。これを「対話力」とよぶ。

これら双方の能力を養成するために、新たな教育プログラムとして「人文学フュージョンプログラム」の構築を目指す。本プログラムでは、人文学を現代的に深化させ、現実的諸課題に対応しつつ、学域を横断して発展させるための基盤的素養としての「古典力」の涵養を図り、また、この基盤の上に、異なる領域の専門家や市民と意思疎通し、人文学の学術的融合を推進できる、幅広い「対話力」を兼ね備えた人材を養成する。

「人文学フュージョンプログラム」では、学生の主体的な活動を展開する4つの場を設定、対話的指導体制の更なる充実を図る。具体的には、前期課程の「基盤プログラム」と後期課程の「発展プログラム」を構築する。基盤プログラムとして、「古典力」と「対話力」の基盤的能力の涵養のための「融合人文学基盤科目群」を開設する。発展プログラムとして、「古典力」と「対話力」を学術的かつ応用的に発展させるため、「融合人文学発展科目群」を開設する。さらには、古典力と対話力を涵養・応用・深化・展開を図る「場」として、「古典ゼミナール」、「コロキウム」、「古典サロン」、「フォーラム」を設け、各科目で活用していく。

「古典ゼミナール」は、異なる専攻の学生が集う自主的な勉強会・読書会の場である。現代の人文学で共通の鍵となる諸概念の基礎的理解や問題認識能力を養う。「コロキウム」は、若手研究者中心の研究報告会の場である。海外連携大学との共同実施などを通じた古典力と対話力の学術的展開をはかる。「フォーラム」は、異なる学域の専門家との学術的対話を、若手研究者が共同で企画・運営し、社会と

の学術的対話力の展開をはかる場である。「古典サロン」は、学術推進研究員等が院生を指導し、学生が一般市民と触れ合いながら表現力や企画運営を学ぶなど、市民へのアウトリーチの実践をはかる場である。

2、地域連携センターとの協同事業

■講義「地域歴史遺産活用論」が「融合人文学基盤科目群」、演習「地域歴史遺産保全活用演習」が「融合人文学発展科目群」として位置づけられた。

■兵庫津・神戸研究会（古典ゼミナール）

・第4回 5/7「山本秀行『アジア系アメリカ演劇』書評会」、報告者：大津留厚・沖野真理香

・第5回 7/16、報告者：池上洵一「法道仙人伝承と摩耶山」・森田竜雄「摩耶山天上寺王蔵院旧蔵文書について」

・第6回 8/10、報告：大津留厚「ボヘミアからミネソタへドイツ系、チェコ系それぞれの移民の歩んだ道」

■1/30「第8回歴史文化をめぐる地域連携協議会 自治体合併後の地域遺産の保全・活用をめぐる現状と課題」（フォーラム）（坂江渉）

■2/20-21「銀山が育てた郷土史家の世界」（古典サロン）（添田仁・三村昌司）（文責・添田仁）

第7章 平成21年度科学研究費助成金・基盤研究(S)

「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」の研究支援

今年度からスタートした上記科研究の拠点的研究施設として、「震災フォーラム in 神戸」（第8回歴史文化をめぐる地域連携協議会）を共同開催した。

「震災フォーラム in 神戸」前日の2010年1月30日には、「現地見学会」として、(1)佐々木和子地域連携研究員・水本有香学術推進研究員の案内で阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターの見学会、(2)松下正和特命講師の案内で神戸大学人文科学図書館地下書庫、同人文科学研究科古文書室、真空凍結乾燥器が設置されている会議準備室の見学を行った。

見学会の終了後には、人文学研究科 A 棟 3F 共同談話室において、研究分担者よりそれぞれ今年度の取り組みについての報告を行う研究会を開催した。

1月31日の「震災フォーラム in 神戸」では、松下正和特命講師が「阪神・淡路大震災よりスタートした被災資料保全活動のその後」と題された報告を行い、次いで研究分担者である佐々木和子地域連携研究員よりは「震災資料の15年」と題された報告が行われた。また、坂江渉地域連携センター研究員が行った報告「阪神・淡路大震災と地域文献資料のその後」には、三村昌司助教が「神戸市関係連携事業一覧表」を作成し、協力を行った。

また、2010年1月より、本科研の研究協力施設である尼崎市立地域研究史料館が所蔵する震災関係行政文書・資料類を、本科研の調査・研究対象とし研究を行うこととなった。具体的には、樋口健太郎氏を学術推進研究員として任用し、尼崎市側からは、同館嘱託の坂江愛・島田克彦両名を研究協力者として調査を進めた。

（文責・三村昌司）

第8章 大学コンソーシアムひょうご神戸 社会連携助成事業

「平常時・災害時における歴史資料の保全・修復ができる人材の育成事業」

本事業は、平成19年7月、大手前大学・神戸女子大学・神戸大学の歴史文化系の3大学連合の形で応募した事業企画が採択を受け、それ以来継続している事業である。昨年度からは、甲南大学と関西学院大学も参加し、5大学連合となった。

また、技術提供のため歴史資料ネットワークのメンバーにも協力を仰いでいる。水損資料の保全・修復ができるボランティア養成のため、各大学および県内自治体で学生や市民・文化財担当自治体職員向けのワークショップをおこない、また関連するシンポジウムなどを開催している。

今年度は、地域に残る文化財を残すため、日常時と災害時にどのような活動をしているのかを地域住民に知ってもらう取組を、神河町教育委員会の協力を得ておこなうこととした。

①古文書調査・整理体験ワークショップ「古文書調査を経験してみませんか」

・日時：2009年12月13日（日）10～15:00

・場所：神河町神崎公民館・視聴覚室

文化財保全活動の実態を地域住民の方々に広く知っていただくことを目的に、古文書の調査・整